

八代平野土地改良

八代平野土地改良事業は、一口でいうと宇土半島と九州山脈に囲まれた八代平野の大部分を占める地域（六千七百七六畝）の農業基盤整備事業であり、又工業用水の確保もあわせ行ない地域の工業地帯としての発展の母胎をつくらうという画期的な事業なのである。

水源計画

八代平野の耕地の大部分は、九州山脈に源を発する球磨川を水源としている。ところが近年、取水施設は老朽化し、年々災害を受け、一方末端地域では、用水路を堰き上げたり、ポンプ揚水によってかんがいを行なっている等の状況で、その労力および維持管理費の増大にかなり悩まされていた。又この地区の中心である八代市は、南九州における随一の工業都市として、昭和三十九年、新産業都市の指定に伴ない、八代市を中心とする不知火工業地帯として発展が期待され、この立地条件の改善や、海陸交通および工業用地等の施策が講じられてきた。

又、工業立地の必須条件として工業用水の確保が急務となり、前述の農業用水と、工業用水を経済的に取水するため、現遙拝堰上流約一五〇畝の地点に統

合取水堰（新遙拝堰Ⅱ堰長二六〇畝）を設け、農業用水一九・五八日、工業用水五・五六日、の取水する計画。すでにこの工事は昨年度から九州農政局により工事が進められている。

用水計画

新遙拝堰により取水した水は、国営幹線用水路三万二千一〇〇畝、県営準幹線用水路二万九千四〇〇畝、団体営主要支線水路一〇万七千三〇〇畝をそれぞれコンクリート三方張として用排水を分離し末端水田まで自然かんがいを可能にし経営の合理化を計ろうというもの。なお、北岸導水路九〇〇畝および日置支線五〇〇畝は工業用水と共同施設として施工する計画である。

排水計画

八代平野は、球磨川と水川に囲まれた沖積であり、又過去六〇余回の干拓事業により造成された土地であるため旧堤防が幾重にも重なっているため排水不良地帯が多く、特に洪水時には滅水による被害を年々受けていた。この排水不良を改良するため、六日雨量三九五畝（確率一〇年に一回）について、洪水時の滅水を最大二日以内にとどめると共に常時の排水路水位を田面下〇・四〜一畝となるように排水路および内外樋門の改修、新設を行なうもの。この事業計画は、県営事

業として排水路四万五千四〇〇畝と、内外堤樋門六カ所、排水ポンプ八カ所の新設、改修を行なうものである。

区画整理と客土計画

農業生産性の増大や農業経営の上から農業機械の導入は欠くことができないので、球磨川北岸地域約千五三〇畝の耕地について区画を統一〇〇畝、横四〇畝に整理を行ない、さらに地力増進をはかる

八代平野は、米、い草とならんで、トマトや西瓜などのビニールハウス栽培が盛ん。とりわけ、金剛地区を中心に、三月中旬から六月中旬頃にかけて出荷される半促成のトマトと、郡築地区を主体に十一月から二月頃にかけて出荷される抑制トマトは、早出しの金剛もの、抑制の郡築ものとして、市場の人気を独占している。半促成トマト

八代のハウス栽培

八代市の栽培面積は、年々倍増に近い増え方を示し、四十年度は二千七〇〇畝となり一戸当り平均も四〇畝と、広島の一〇畝、岡山の三〇畝をはるかに抜いて、いまや、い草生産の王座をとって代ろうという勢いにある。

みだしている。栽培技術も年々進み、たとえば、出荷時期にしても、三十八年には五月だったのが、今年は二カ月前にも短縮されて、三月中旬から出荷が行なわれるなど、益々、販売価値を高めている。一方、抑制トマトも、出荷期間の内、十二月と一月は市場占有率は五〇%と市場を風びしている。さらに抑制トマトに引続き、西瓜が二月から三月にかけて、ハウスに定植され、

八代地方のそさい

八代地方は、冬季温暖な気候と肥沃な土壌等野菜生産の立地に恵まれている。これらの条件を活かした水田利用による、かぼちゃ、きゅうり、西瓜等の早出栽培が行なわれ、古くから全国的にも知られた産地である。

しかし戦後はこの地方特産、い草の作付が年々増大してきたことが、土地の排水条件を悪くしたり、栽培適地が少なくなり、また労力の競合などもあり、野菜の作付面積は必ずしも伸びてきていない。しかしこの地方で栽培される野菜の種類は多く、生産数量もかなり豊富である。戦後しばらくは農業団体の力が弱く、生産体制もとのわなままで、産地が混乱した時期もあったが、漸次系統共販が強化され、現在でも、依然熊本県における輸送園芸の中心産地であることに変わりはない。

現在、施設園芸、特にビニールハウスの栽培では、県下ハウス面積延三〇〇畝の内約五〇%近い、一四〇畝を占めている。八代市、宮原町、鏡町等、産地が纏ってきているこのハウス栽培は、トマトを主体にして作型別には、半促成トマト約八〇畝、抑制トマト二〇畝、半促成きゅうり一〇畝、ハウス西瓜一〇畝その他となっている。トンネル栽培は、産地がい草に転換されてきているので、作付面

積も減少傾向をとり、現在では竜北村、鏡町、千丁村、八代市海岸線を中心に、かぼちゃ五〇畝、西瓜三〇畝、露地メロン及びまくわ二〇畝、春まき白菜二〇畝、いちご一〇畝等となっている。

このようにハウスの栽培面積は年々増加してきているが、トマトを中心に販路は、九州地域はもちろん京阪神までの本格的出荷を実施している。品質においては好評を得ており更に計画的出荷を継続して市場占有率を高めていけば全国的にも特色ある産地となるであろう。その反面、八代特産の代表かぼちゃは、生産の減少につれて、仕向大消費市場に対する入荷は減少してきている。かつてのかぼちゃ列車を繰り出して「八代かぼちゃ」「八代すいか」の名を全国的に喧伝した往年の面影はない。

八代農業の変貌による産地の消長であるが、昭和四十年には八代市、鏡町が国の野菜指定地となり、品目トマト、対象仕向地域、北九州、京阪神地域と指定されたので、県が実施している特産野菜集産団産地有成事業と相俟って施策的にも大市場供給のための、産地近代化を推進することになる。今後は生産者の自主的組織を更に強化拡大して、農協などの体制を整備して共販の推進をはかるならば一方では、八代平野土地改良事業の実施などあり、問題の土地基盤条件も整備されることとなるから、今後施設園芸を中心とした産地として飛躍的發展が期待される

共販で「売手市場」へ

しかし製品の段階で、あるいは流通機構のなかで、なお肥後表が備後表に水をあけられている点、検討すべきいくつかの課題があるようだ。共販の問題もそのひとつ。い製品の一〇〇%共販を実行している、八代郡鏡町北新地農協の場合をみてみよう。

ことになっていのである。もちろん、これも、組合員と、生産、集荷、販売、金融などに、独特な運営システムを駆使しながら組合員をリードしている農協指導者の力に負っていること、は、いうまでもないが、何よりも、目前に現われる共販の効果が、大きな推進力となっているのだ。

工芸作物

本県特有の工芸作物であり、四百有余年の歴史と伝統をはこび草は久しく全国生産量の約半の生産をほこってきた。岡山県が工業地帯の出現及び労力不足と労賃高から、近年では全国生産の増強の生産に後退を示している反面、需要は住宅復興の機運に恵まれ、漸増の傾向を示しそのため岡山県に代る供給期待産地として脚光を浴び生産拡大を要望されてきている。こういった要望に応えるため生

産量はもちろん栽培加工の改善も著しいものがあつたため、栽培面積約三千畝、生産量約三万トと全国生産量の約半を示し、岡山県に極めて近い生産量を挙げ、生産額も三〇億に及ぶ全国第二位の生産県になった。